

正しさはその働きによって判る マタイ11:16~19、25~30

かつて私が韓国にいたとき、宣教師たちの墓地に行ったことがあります。ほとんどがアメリカやイギリスから来た宣教師たちであり、ロシア人、日本人宣教師もいました。本当に興味深いことでしょう。日本からも韓国に渡ってきた宣教師たちがいました。私はそこで、宣教師の墓地で当時の宣教師たちのことについて様々な想像をしてみました。明らかに彼らも、言葉や文化、食べ物など、他国の生活が簡単ではなかったでしょう。さらに、韓国も他の文化に対して排他的だったので、困難なことも多く起こったと思います。誰も宣教師のことを認めてくれなかったでしょうし、彼らを敵とみなす人もいたでしょう。当時の宣教師に比べると、私は、とても良い環境で働いていると思います。私の説教を聞いてくださり、いろいろな面で助けてくださる皆様がおられるからです。そして、キリスト教に対する認識もだいぶ良くなりましたので、今の宣教師の状況は危なかったり、悪かったりしません。しかし、当時の宣教師たちは、そうではなかったと思います。宣教の状況がどうなるか、未来がどうなるか、すべてのことが不透明で危険でした。それにもかかわらず、彼らは福音を伝えるのをやめませんでした。自分たちを犠牲にし続けました。そして、このような献身によって、韓国にも多くのクリスチャンと教会が生まれることになりました。

福音を伝え、宣教をするということ、それは容易ではないことだと思います。過去よりは良くなったとしても、信仰を持って福音を伝えるということには、変わらず自己犠牲と献身が必要です。その上、その犠牲と献身を認めてくれる人も多くありません。むしろキリストに従っているということを変に思う人もいます。ですから、皆様、こうして主日の礼拝のために集まると、主の御名によってお互いに認め、励ましてください。私たちが互いに認め、励まさなければ、誰も私たちが認め、励ましてくれません。主は、皆様の献身と犠牲を覚えてくださいます。隣人に向かった皆様の優しい言葉と行動、主のために耐えたことと宣教への献身は、絶対に無駄にはなりません。だからどんな状況でも頑張りましょう。私たちの宣教師のように、私たちの献身は必ず実を結ぶことになるからです。

今日の福音書で、イエス様は当時の状況について語られます。当時の人々は排他的でした。政治的にも宗教的にも、お互いに不信感を抱いていました。イエス様はこのような状況をたとえられます。16~17節の言葉です。「今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった。』」このたとえでは、友達に呼びかけている子供たちが登場します。子供たちは、友達と交わるためにいくつかの遊びを提案します。笛を吹いたり、葬式の歌を歌ったりします。普通の友達なら、笛を吹くと踊り、葬式の歌を歌えば悲しんでくれるでしょう。しかし、この友達は何も反応しません。一緒に交わろうとしなかったのです。

これは、当時の状況が非常に排他的で、お互いに対する不信に満ちていたことを示すことだと思います。イエス様の時代には、政治的には親ローマ派と反ローマ派、宗教的には、律法主義と禁欲主義などに人々が分かれています。そして彼らは、自分たちの正しさを主張し、お互いに認めませんでした。神様によって選ばれた同じ民族でしたが、お互いが自分の敵だと思いました。エルサレムがローマによって滅ぼされたのも、反ローマ派の人々が神殿を侵略して、ローマ軍と親ローマ派の人々を殺したからでした。自分たちだけが絶対正しいと思っている時代、隣人については何の関心も持っていなかった時代、お互いが自分のための神様を探し求めた時代が、イエス様の時代でした。このような時代にイエス様がこの世に来られたのです。そのため、イエス様の言葉に耳を傾けたり、イエス様の言葉を受け入れたりする人は、多くありませんでした。まるで今私たちの時代と同じだと言えるでしょう。排他的で不信に満ちた人々には、どんな神様の言葉でも根付きにくいのです。

それでイエス様は、彼らが神様の言葉にどう対しているかを語られます。18~19節の言葉です。「ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食

いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。」韓国のことわざの中で、鼻にかけたら鼻輪、耳にかけたら耳輪という言葉があります。これは、自分に有利になるように、根拠を勝手に示すことを言うのです。当時の人々、特に各宗派の指導者とその支持者たちの態度がそうでした。神様の言葉には関心がなく、自分たちの主張を貫くためには、相手を一挙手一投足を非難しました。ルカによる福音書1章15節によると、洗礼者ヨハネは、メシアの道を整えるためには、ぶどう酒や強い酒を飲んではいけませんでした。また、荒れ野で悔い改めの洗礼を宣べ伝えながら、イナゴと野蜜を食べるなど禁欲的な生活をしました。そこで、各宗派の指導者たちは、洗礼者ヨハネの食べも飲みもしない生活を見て、悪霊に取りつかれていると非難しました。しかし、逆にイエス様が多様な人々と交わり、いろいろな宴会に招待されると、イエス様のことを大食漢で大酒飲み、徴税人や罪人の仲間だと言いました。禁欲的な生活をして、福音のために人々と交わっても、戻ってくるのは、非難の言葉しかありませんでした。それでイエス様はこう言われます。「知恵の正しさは、その働きによって証明される(19節)。」非難の言葉が人を判断するのではなく、行った働きが人を判断しなければなりません。それが知恵であり、正しいことです。

私たちの信仰の先祖たちも、私たちの宣教師たちも、そうだったと思います。彼らもいろいろなことによって非難され、誤解されたでしょう。神様を信じるという理由で、福音を伝えるという理由で、人々に認められず、不信を買ったこともあるでしょう。しかし、彼らに対する非難と誤解によって、彼らは判断されませんでした。彼らが行ったこと、彼らの働きによって彼らは判断されました。だから、私たちが反対されることがあったとしても、非難されることがあったとしても、失望しないでください。私たちも、私たちの働きによって判断されることになるでしょう。先々週の福音書でイエス様は、「弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である」と言われました。イエス様がこの世から反対されたら、私たちが反対されるのが当然なことでしょう。

イエス様は、多くの人々から反対されました。そして反対する人々は、ますます増えました。しかし、皮肉なことに、このような人々の反対によって、イエス様は神様のお働きについて分かりました。今日の福音書26節の言葉です。「そうです。父よ、これは御心に適うことでした。」イエス様は、神様が人々の反対を通してお働きになることが分かりました。これは、自らが知恵ある者だと思っている人々、自分は賢い者だと思っている人々には隠して、幼子のような者にお示しになるためでした。真理は多くの人々の考えによるものではありません。神様の言葉によるものです。そして神様は、真理の言葉をイエス様を通して示されました。ですから、イエス様に従う人が多くないとしても、又は多数によって反対されているとしても、私たちの道を疑ってはなりません。むしろ、反対によって真理が明らかに示されるのです。

イエス様は29節で「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」と言われます。ここで「わたしの軛を負い」というのは、ユダヤ社会で師匠と弟子との関係を示すときに慣用句として使う言葉だそうです。そしてユダヤ社会では、家畜に軛を負わせる時、一頭ではなく二頭に軛を負わせて働かせたそうです。したがって、イエス様の言われた「わたしの軛」とは、イエス様の軛が自分渡されるだけと言うではありません。師匠であるイエス様と共に軛を負うことを意味するのです。「わたしと共にわたしの軛を負って働こう」これがイエス様が私たちにおっしゃる言葉だと思います。そして、イエス様と共に軛を負って、神様の働きをすると、私たちはどんな反対や非難や誤解にも安らぎを得られると思います。イエス様が私たちを導いてくださるからです。ですから、信仰によって起こることについては、心配しないでください。この世が私たちのことを認めてくれないからと気を落とさないでください。私たちは、私たちの働きによって私たちの正しさを説明することができるのです。私たちによって行われるすべてのことが神様の御心に適うことになりましますように。イエス様の軛を共に負うことによって、真の安らぎを得られ皆様になりますように主の御名によって祈ります。アーメン